

# 「使い捨てられる若者」の排出過程に関する 実証的研究

— 人的資本から教育資本へ —

教育学部教授 原 清 治

## 抄 録

先進諸国において近代化を促進するプロセスを解明するひとつの理論として人的資本 (human capital) 論がある。人的資本論は、個人により高度な教育機会を提供することが人間の資本としての資質を向上させ、良質な労働力を多く輩出し、結果として国家の近代化が促進されることにつながるという文脈を辿るものである。たとえば、発展途上国における教育開発や教育計画の多くは人的資本論にもとづいていた。しかしながら、先進諸国の経済成長から理論化された人的資本論は限界を迎えつつある。その証左として、先進諸国を中心として、正規雇用にくることができずに非正規雇用に就かざるをえない若者である「使い捨てられる若者」の増加があげられる。本研究は、先進諸国のなかでもとくに高学歴フリーターの多い日本において、「使い捨てられる若者」がどのように排出されてい

るのかという過程について、計量分析を用いて明らかにすることを目的としている。

結果として、日本型の「使い捨てられる若者」は、学力を基底とした分布によって使い捨てられる過程に大きな違いがみられ、その背景に応じた就業支援をしなければ、彼らを再び正規雇用へ移行させることは難しいという実態が析出された。翻って、その対策としては、子どもたちに対する教育の熱意やまなざしが彼らの人的能力を向上させるという「教育資本」論の視点が、日本型の「使い捨てられる若者」に対して一定の効果をあげることができるのではないかという点にも言及している。

キーワード：人的資本、教育資本、使い捨てられる若者、教育開発

## I. 先進諸国における「使い捨てられる若者」の問題

教育は人的資本の開発に資する主要な装置であり、世界の多くの国々において、経済発展の重要な基礎条件のひとつであるとされている。そこでは、より高度な教育機会を提供することが人間の資本としての資質を向上させ、良質な労働力を多く輩出することによって国家の近代化が促進されるという人的資本論の前提に立っ

た議論が展開されてきた。

しかし、2000年前後から先進諸国を中心として人的資本論の根幹である高度な教育機会の提供が必ずしも良質な労働力となりえない事態が散見されるようになった。低賃金労働に従事する若者や就業や無業状態の若者である。彼ら若年未就労者をめぐっては、先進諸国が共通して解決しなければならない問題となった。

若年未就労者に関する問題は、たとえばヨー

ロッパやアメリカ社会を中心に移民労働者の教育問題としてさまざまに語られてきた。彼らの多くは、教育機会を得る条件が整備されずにその人的資本が低位な状態に留め置かれ、それを理由に労働世界に参入できずにいることが少なく、今日に至ってはその数が急増している。

しかしながら、若年未就労者の一部においては、高学歴であったり、家庭的に恵まれているにもかかわらず、職業意欲が低かったり、労働に対するメンタリティが低位に留まっている若者が誕生しつつあり、就労をめぐるこれまでの若者の解釈に「ゆらぎ」が生じているという報告が届きはじめている。それは、換言すれば、低位の就労意識しかもち合わせていない層の登場であり、かつ、低賃金での労働に追いやられる社会的弱者としての若者の存在である。

そうした「使い捨てられる若者」について、これまでも先行したインタビュー調査から学力階層によってその背景が異なるのではないか、という仮説を導いてきた<sup>(注1)</sup>。すなわち、学力上位でありながら高校で成績が下がってしまい、「就業」という迷路に迷う若者、学力中位であったが、高校で成績が下がり、経過的措施として「使い捨てられている」ことを選択する若者、学力下位のまま「就業」という迷路にたどり着かない若者、の3つの「使い捨てられる」パターンの発見である。したがって、現在の状態は「使い捨てられている」という意味においては同じであっても、そこに至るまでのプロセスには大きな違いがみられ、とくに学力の高低によって大きな差異が存在したのである。

本論文では、前述したインタビュー調査をもとに、アンケート調査によって「使い捨てられる若者」の発生プロセスや彼らの意識の背景に何がみられるのかについて明らかにしていきたい。インタビュー調査で分類分けした学力別に「使い捨てられる若者」を分析したとき、彼らの就業観や生徒時代の学校・家庭生活にどのよ

うな違いがあるのかについての計量的分析をおこなった。

## Ⅱ. 調査の概要および調査結果

前節で用いた定義をもとに、関西圏に在住する低賃金で働く若者464名を対象にアンケート調査を実施した。調査のサンプルは以下のとおりである（表1参照）。

【調査時期】2007年6月～9月

【調査対象】関西圏に在住する18歳から35歳までの低賃金労働者464名

【調査方法】質問紙調査（個別自計式、持ち帰り記入法を併用、層化二段抽出法）

表1 サンプルの属性

男	65.9	(n=306)
女	34.1	(n=158)
合 計	100.0	(n=464)
<hr/>		
18-19歳	79.3	(n=368)
20-25歳	18.5	(n=86)
26-30歳	0.8	(n=4)
31-35歳	1.2	(n=6)
合 計	100.0	(n=464)

まず、今回のアンケート調査は「使い捨てられる若者」にどのような学力分布がみられるのか、について考えてみたい。次の図1は対象の若者の中学および高校での学力分布とインタビュー調査から作成した「使い捨てられる若者」モデルと、今回新たに作成した「学力上昇層」と「学力最上位層」の概念図である。

図をみても、高校時代の学力が下位のグループに集中して「使い捨てられる若者」が多くみられることがわかる。とくに、中学時に学力上位だったにもかかわらず、高校時に学力下位になってしまった若者が全体の33.6%いる実態は、社会から排除される階層である学力最下層

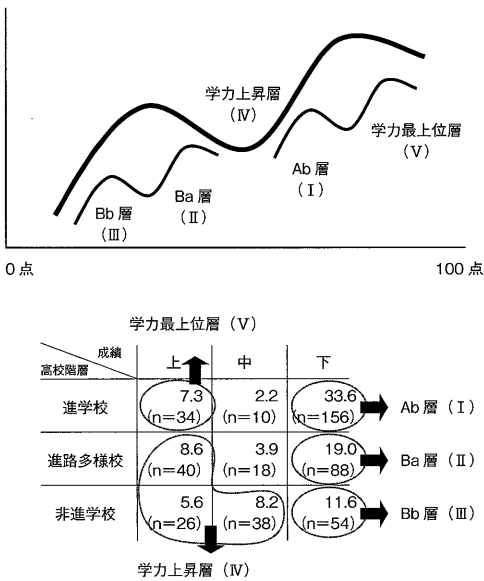


図1 「使い捨てられる若者」と中学・高校学力分布

から「使い捨てられる若者」が多く排出される欧米にはあまりみられない日本独特の特徴といえよう。

そこで、本論文ではまず学力変数を欧米での階層変数と比較するに際して、それがどの程度妥当であるかを検討したい。

そもそも、フリーターに代表される若年労働問題に先駆的な役割を果たしたのは、日本労働研究機構(以下J I Lと略記: 現日本労働研究・

研修機構(J I L P T))である。J I Lでは若年未就労者が社会問題となる以前から計量調査を続けており、若年未就労者がどのような変遷を遂げたのか、という知見を提供している。

J I Lがおこなった一連の調査のなかで、フリーターと学歴、とくに高校卒業者との相関を指摘したのは、堀有喜衣(2002)である。堀はそれまで日本の若年失業者の低さの理由は、非進学者である高校生を学校に引きつける「日本的な高卒就職」<sup>(注2)</sup>であり、彼らの労働力の質の高さが日本の経済成長を支えていると論じた<sup>(注3)</sup>。しかし、高校での進路指導の機能不全は非進学者の高校へのコミットメントを低下させ、高校生活を「パートタイム」化させてしまい、フリーターへの道筋をつけ、彼らの予定進路に大きな影響を与えた。表2はパートタイム生徒の成績と予定進路をクロス集計した結果である。

これを見ると、フリーターになる割合が、成績上位や中位よりも下位の生徒のほうに多いことがわかる。また、成績の高さに関わらず、パートタイム生徒は非パートタイム生徒よりも2倍以上フリーターとなることが指摘できる。加えて、進路が「まったく未定」というニート予備軍は、成績下位のパートタイム生徒に圧倒的に多い。彼らは、さまざまな学校生活から取り残されているために、進路指導をあまり受ける機

表2 パートタイム生徒別予定進路と成績

成 績		予定進路									
		正社員就職 内定あり	正社員就職 内定なし	専門・各種学校 進学先決定	専門・各種学校 進学先未定	大学・短大 進学先決定	大学・短大 進学先未定	フリーター	家事手伝い	その他	まったく未定
成績上位 から中位	パートタイム生徒	19.4	9.3	21.0	4.0	7.3	12.1	18.5	2.8	2.0	2.8
	非パートタイム生徒	28.0	4.9	25.8	3.6	19.8	9.0	6.4	0.5	0.6	1.3
	計	27.5	5.1	25.5	3.7	19.0	9.2	7.1	0.7	0.7	1.4
成績下位	パートタイム生徒	14.5	10.7	13.2	6.3	1.6	6.0	34.2	3.6	1.3	8.3
	非パートタイム生徒	28.6	7.2	23.8	5.4	6.2	5.4	17.4	1.6	0.9	3.4
	計	25.8	7.9	21.7	5.6	5.3	5.5	20.7	2.0	1.0	4.4

(資料) 堀有喜衣「高校生とフリーター」小杉礼子『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構 2002 p.125

会をもてず、就職活動もしないままフリーターやニートになっていると考えられる。

だが、このデータは次のようにも読み取れる。たとえ成績下位であっても学校生活にコミットメントしている非パートタイムの生徒の28.6%は就職内定をもらっており、反対に成績が上位または中位であってもパートタイム生徒であれば18.5%がフリーターとなる。つまり、学力の低さは必ずしも「使い捨てられる若者」となるための条件ではない。同様に、学力が高ければ「使い捨てられる若者」にならないとも限らない。しかしながら、高校での学業成績は「使い捨てられる若者」予備軍の傾向を表わす重要な指標となると考えられる。

本研究において「使い捨てられる若者」変数を抽出するに際しては、JILデータと同様に高校での成績に注目したい。高校での成績はその後の進路形成に大きな影響を与え、結果、彼らの「使い捨てられ」観に反映すると考えたのである。最近の学力研究からは、成績に大きな影響力を与える変数として、子ども時代の家庭環境や文化資本といった社会階層との相関を指摘しているものも多くみられ、「使い捨てられる若者」を学力変数によって説明することは、欧米の階層変数とほぼ同義に用いることが可能ではないかと考えた。

高校での成績と社会階層変数との相関を調べるためのプロセスについて説明したい。まず、図1から「使い捨てられる若者」3層と成績最上位層の計4層を取り出す。学力上昇層とその他のカテゴリーについては学力を順位付けして層化できないため、成績変数として取り扱わない。

次に社会階層を表す変数を抽出し、社会階層を表す階層合成変数を作成<sup>(注4)</sup>し、相関係数を算出した。

結果として、学力得点と社会階層変数との相関係数は0.356となり、高い相関が認められた(1%水準有意)。

	学力得点
階層合成変数	0.356***

(\*\*\*:  $p < 0.01$ )

(表注1) 階層合成変数を作成するために投入した変数には「家族とよく会話する」、「家に勉強する雰囲気がない」「よく図書館を利用」「しっかり宿題をする」を使用

(表注2) 高校での学力得点は、上から順に成績最上位層を4、Ab層を3、Ba層を2、Bb層を1とする。

$$r_{xy} = \frac{S_{xy}}{S_x S_y}$$

堀の先行研究からも同様に高校での学業成績と進路選択は相関関係にあり、とくに、大学や短大の進学率は成績の上下によってその格差が大きいことが指摘されている。

また、高校3年次にどのような進路選択をするのかは、父親の職業や父親の学歴、家の経済的な豊かさといった社会階層を代表する変数との相関が高い。したがって、以下の分析に用いる高校での学力変数は社会階層の擬似変数と置き換えたうえで、分析を進めていきたい(表3参照)。

ここでは学力上位から下位のグループへ下降した33.6%の層を学力の4層構造でのAb層、学力中位から下位のグループへ下降した19.0%のグループをBa層、学力が下位のまま変わらなかった11.6%のグループをBb層として、それぞれの層の若者の特徴を数値によって明らかにする。

Iの「迷路」で迷う若者、IIの経過的措置として「使い捨てられる」ことを選択する若者、IIIの「迷路」にたどり着かない若者、学力上昇層(IV)および学力最上位層(V)それぞれの若者の意識について分析していきたい。

それでは、それぞれの学力を形成する要因のなかで何がどの程度強いのだろうか。まず、「性別」、家庭生活を表す「塾に通っていた」、学校生活を表す「学校が好き」、フリーターを続ける理由として「低賃金でも『やりがい』」の4項目を共通の独立変数とし、学力層を従属変数として重回帰分析<sup>(注5)</sup>をおこなった(表5参照)。

表3 高校3年生1～2月時点における進路予定と社会階層

		正社員内定	専各	短大	四大	フリーター・ニート	その他	合計
父 職	専門・技術、管理	6.8	29.7	5.9	39.0	14.4	4.2	100.0
	事務・販売	20.6	28.6	15.9	17.5	14.3	3.2	100.0
	工具、作業員、運輸	10.4	29.2	9.4	12.5	31.3	7.3	100.0
	職人的仕事	21.4	26.2	9.5	14.3	23.8	4.8	100.0
	自 営	18.2	25.5	9.5	21.2	16.8	8.8	100.0
父学歴	中学校	18.1	28.9	8.4	13.3	20.5	10.8	100.0
	高 校	16.0	24.2	9.3	21.6	22.2	6.7	100.0
	専 各	18.8	34.4	12.5	9.4	21.9	3.1	100.0
	短大・大学	7.2	32.2	10.0	35.6	11.1	3.9	100.0
生家の 経済的 豊かさ	豊かである	20.7	19.0	5.2	31.0	20.7	3.4	100.0
	まあ豊か	19.5	28.9	10.5	23.2	11.6	6.3	100.0
	あまり豊かでない	27.1	29.1	7.1	15.0	15.3	6.5	100.0
	豊かでない	21.8	21.1	7.7	21.1	25.4	2.8	100.0
	わからない	29.2	21.5	7.2	15.9	18.5	7.7	100.0
	無回答	25.0	25.8	5.8	16.7	20.0	6.7	100.0
	全 体	24.8	25.6	7.6	18.6	17.4	6.0	100.0

(資料) 耳塚寛明「誰がフリーターになるのか ―社会階層的背景の研究―」  
小杉礼子『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構 2002 p.135

表4 全変数を独立変数とした「使い捨てられる若者」の分散分析結果

	立ちすくむ	経過的	たどり着かず	学力上昇	学力最上位
年齢	0.154	0.647	0.503	0.691	0.082
性別	2.364	0.162	3.469 *	0.137	0.202
自分の時間を有効に使う	4.349 **	0.103	2.980 *	0.140	0.262
将来就きたい仕事かわからない	2.075	1.013	1.791	0.078	0.018
アルバイトだけでも生活できる	0.258	0.001	0.238	1.134	0.020
努力して働くことがイヤ	0.367	0.010	0.225	0.113	1.511
自分にあった仕事を探している	0.817	5.775 **	0.662	5.712 **	0.181
正社員よりもたくさんお金が稼げる	0.056	0.428	0.007	1.548	0.220
低賃金でも「やりがい」	3.381 *	0.028	0.076	0.459	5.298 **
一生低賃金に賛成	0.403	0.669	0.558	0.144	2.611
低賃金でも好きな仕事or高収入だが嫌な仕事	0.546	0.469	0.272	0.029	3.977 **
アルバイト経験	0.638	0.181	0.191	2.221	1.069
周囲のフリーター率	1.124	0.130	3.567 *	0.080	1.967
親の教育関心が高い	6.679 **	0.000	0.386	9.094 ***	0.853
塾に通っていた	2.252	2.391	0.158	7.328 ***	0.063
博物館・美術館に行く	0.021	0.265	0.923	2.211	0.439
動物園・キャンプに行く	0.691	0.168	3.251 *	0.451	0.051
勉強しろと言われた	0.009	3.407 *	0.151	1.380	2.347
学校の話題	0.732	0.050	0.211	0.291	0.052
進路に関して干渉された	0.002	0.062	1.966	2.367	1.011
家族とよく会話	5.115 **	2.109	0.582	0.043	1.517
欲しいものを買ってもらえない	0.666	0.132	0.001	1.095	0.134
小遣いをきちんともらう	2.585	0.559	0.250	0.813	10.450 ***
まわりに勉強する雰囲気なし	2.722	0.379	3.596 *	0.032	0.341
図書館を利用	2.417	6.124 **	2.427	0.013	6.889 ***
テレビゲームで遊ぶ	2.790 *	1.596	0.003	0.663	0.022
宿題をきちんとする	4.743 **	3.679 *	10.571 ***	0.159	5.239 **
家族で外食する	0.003	1.427	0.017	0.831	0.076
友達が多いほう	5.677 **	1.467	0.332	0.245	0.808
ぼーっとしている	0.034	0.832	2.186	0.142	0.509
学校が好き	4.610 **	1.806	0.043	0.154	2.010
仲のよい先生が多い	0.554	0.549	0.812	0.811	0.298

(\*\*\*:  $p < 0.01$ , \*\*:  $p < 0.05$ , \*:  $p < 0.1$ )

表5 学力層別重回帰分析の結果

	迷う	経過的措施	たどりつかない	学力上昇	学力最上位
性別（男性＝1、女性＝2）	－0.055	－0.055	－0.133	－0.052	0.029
塾に通っていた	0.110	0.110	－0.033	0.180 **	－0.001
学校が好き	－0.084	－0.084	0.008	0.025	0.089
低賃金でも「やりがい」	－0.011	－0.011	0.012	0.031	0.149 *
R <sup>2</sup>	0.020	0.020	0.020	0.035	0.033

(\*\*: 1 %水準で有意、\*: 5 %水準で有意、n＝430)

ここでは、共通の項目を取り出して重回帰分析をおこなったが、学力上昇層での「塾に通っていた」、および学力最上位層での「低賃金でも『やりがい』」の項目でのみ有意な結果を得られたが、他の項目ではほとんど有意な結果を得ることができなかった。また、決定係数の値はどれも低く、彼らを説明する数値とはなりえていない。すなわち、各学力層によって影響を与える変数に相当の違いがあるために、共通の変数を用いて分析することが難しいことを示していると考えられる。したがって、ここでは、「迷路」で迷う若者（Ab層）、経過的措施として「使い捨てられる」ことを選ぶ若者（Ba層）、「迷路」に向かって立ち上がろうとしない・たどり着かない若者（Bb層）、学力上昇層、学力最上位層それぞれの学力階層を従属変数、その他の各項目を独立変数として個別に重回帰分析をおこない、各学力を規定する要因について分析をおこなった。

①迷路で迷う若者の分析結果

はじめに、迷路で迷う若者についての分析結果をみていきたい（表6参照）。

これをみると、Ab層の若者にもっとも影響力を与えている項目は「親が自分の成績に関心がある」であった。彼らはもともと学力上位の若者であったため、家庭環境は比較的恵まれていると考えられる。したがって、親の立場としても子どもの学校成績には常に気にかけていたことがうかがわれるのである。次に影響力を与えている項目は「将来就きたい仕事かわからない」であった。彼らの多くは学校成績が急落してしまったために将来の見通しがたたなくなってしまったと考えられる。したがって、将来自分が何に向いているのか、どんな仕事か自分にとっての転職なのか、模索している段階だといえるだろう。ゆえに、社会にあるさまざまなアルバイトを経験することによって、自分の将来の仕事を見つけようと考えられるのである。

表6 迷路で迷う若者（Ab層）を従属変数とした重回帰分析の結果

	非標準化係数				
	B	標準誤差	β	t	有意確率
(定数)	0.858	0.195		4.406	0.000
将来就きたい仕事かわからない	0.069	0.038	0.133	1.824	0.070
アルバイトだけでも生活できる	－0.037	0.041	－0.068	－0.918	0.360
親が自分の成績に関心がある	0.100	0.037	0.185	2.731	0.007
家族とよく会話	0.051	0.035	0.099	1.458	0.146
小遣いをきちんともらう	0.046	0.031	0.099	1.483	0.140
自分は友達が多いほうだ	0.071	0.041	0.123	1.718	0.087
学校が好き	0.054	0.039	0.101	1.400	0.163

(R＝0.336、R<sup>2</sup>＝0.113、n＝430)

して、家庭環境の項目としては「自分は友人が多いほうだ」が影響力をもっていた。たとえ学力が急落してしまっているとしても、それが友人関係に齟齬をきたすとは考えておらず、まわりの友人の数は比較的多いものだととらえている傾向がうかがえるのである。そのほかにも「学校が好き」といった学校文化との親和性の項目でも高い $\beta$ 値を示していることが「迷路」で迷う若者の特徴であるといえる。

## ② 経過的措置として「使い捨てられる」ことを選択する若者の分析結果

次に経過的措置として「使い捨てられる」ことを選択する若者についての分析結果である(表7参照)。

これをみると、経過的措置として「使い捨てられる」ことを選択する若者にもっとも影響を与える項目は「自分にあった仕事を探している」であった。しかし、 $\beta$ 値がマイナスに出ているため、彼らは「自分にあった仕事を探す」ためにアルバイトを続けてはいない。むしろ、最初から志望している職業は決めており、「こんなところで自分の人生は終わ리たくない」、「この仕事は将来の自分のためのステップだ」と強く考えている。しかし、現時点の彼らの知識や技術ではその仕事に就くのは難しい。そこで、生

活費を稼ぐため、自分の志望の仕事に就くための経過的措置として「使い捨てられる若者」を選択していることが多いと考えられる。

そのほかにも「親から『勉強しろ』といわれた」が高い $\beta$ 値を示している。中学時まで平均前後であった成績が高校で急落したために、親としては「なるべく以前のような成績に戻ってほしい」との願いから「勉強した方がいいんじゃないか」といった言葉がよく出てくるようになったのではないかと推察される。また、「塾に通っていた」割合が学力最上位層よりも多いため、経済的な負担が大きい塾に通っていた若者の多いこの層は、I.「迷路で迷う」若者ほどではないにせよ、ある程度高い社会階層出身の若者であることがわかる。

## ③ 「迷路」にたどり着かない若者の分析結果

次に学力最下層であり、「迷路」にたどり着かない若者についての結果である(表8参照)。

これをみると、Bb層にもっとも影響を与える項目は「宿題をきちんとする」であった。しかし、これも先ほどのBa層と同様にマイナスの $\beta$ 値になっているため、Bb層の若者は他の層と比べて宿題をする習慣がなかったということになる。すなわち、学校文化との親和性が低く、学力の低さと学校文化との親和性が相関し

表7 経過的措置として「使い捨てられる」ことを選択する若者(Ba層)を従属変数とした重回帰分析の結果

	非標準化係数		$\beta$	t	有意確率
	B	標準誤差			
(定数)	1.585	0.198		8.003	0.000
性別	-0.005	0.063	-0.006	-0.080	0.936
自分の時間を有効に使う	-0.004	0.033	-0.009	-0.133	0.894
低賃金でも好きな仕事	0.066	0.067	0.068	0.992	0.322
自分にあった仕事を探している	-0.074	0.032	-0.155	-2.283	0.023
塾に通っていた	0.027	0.024	0.077	1.108	0.269
勉強しろと言われた	0.043	0.027	0.113	1.620	0.107
家族で外食する	0.030	0.031	0.067	0.982	0.327
テレビゲームで遊ぶ	0.029	0.027	0.076	1.046	0.297

(R=0.255、R<sup>2</sup>=0.065、n=430)

表8 迷路にたどり着かない若者（Bb層）を従属変数とした重回帰分析の結果

	非標準化係数				有意確率
	B	標準誤差	$\beta$	t	
(定数)	1.751	0.184		9.541	0.000
性別	0.073	0.046	0.108	1.561	0.120
周囲にフリーター	0.035	0.025	0.098	1.404	0.162
努力して働くことがイヤ	-0.027	0.024	-0.076	-1.109	0.269
正社員よりもたくさんお金が稼げる	-0.003	0.025	-0.007	-0.106	0.915
動物園・キャンプに行く	0.025	0.020	0.084	1.233	0.219
まわりに勉強する雰囲気がない	0.017	0.024	0.051	0.731	0.466
宿題をきちんとする	-0.056	0.021	-0.183	-2.593	0.010

( $R=0.294$ ,  $R^2=0.086$ ,  $n=430$ )

ていることを示している。彼らは欧米での「使い捨てられる若者」と同様の傾向がみられる。学校文化との親和性の低さであったり、社会階層においても低位であったりするのは、欧米で議論される社会的排除の対象となりえる人々の特徴と似通っている。ウィリスが『ハマータウンの野郎ども』で描写した「野郎ども」とBb層の若者は多くの共通点をもつといえる。宿題をしない、学校が好きではない、まわりが勉強している雰囲気がない、といった項目は学校文化を受け入れず、学校になじむことは自分たちの対抗関係にある「ヤツら」に従うことだと考えていた「野郎ども」の考え方に近い。それ以外の項目としては「友人にフリーターがいる」、「性別」といったものに特徴がみられる。やはり「迷路」にたどり着かない若者のまわりには彼らと同様に「使い捨てられる若者」が多いことが推測される。

友人が「半数以上」フリーターであると答えていたのはBb層のみである。ほかの4層からは若干「ほとんどすべて」フリーターであるという答えも出てきたが、学力別に比較した場合、この層の発生率はほかの4層と比べて明らかに多い。このように学力の低い若者は社会階層も低く、その周りにいる友人も彼らと同様に学校に対して否定的な態度をとる、といったところに欧米の「使い捨てられる若者」と同様の特徴

がうかがえるのである。

#### ④ 学力上昇層の若者の分析結果

それでは次に、学力上昇層の若者に対する分析結果である（表9参照）。

これをみると、学力上昇層にもっとも影響を与えた項目は「塾に通っていた」であった。しかし、これも先ほどと同様に、マイナスの $\beta$ 値であるため、彼らの多くは塾に通っていないことが明らかとなった。学力最下層であるBb層よりも学力上昇層は社会階層が同等、もしくは低いことが考えられる。しかし、Bb層と違い、学力上昇層は学力が向上している。

その要因として、「博物館・美術館に連れて行く」が高い数値を示している。たとえ社会階層が低い家庭であっても、子どもに対して教育熱心な家庭であれば学力を上げることは可能であることをこのデータは示している。近年の学力データをみたとき、通塾が子どもたちの学力に大きな影響を与えることは先行研究より明らかであり、塾に通える経済的余裕があるかどうか子どもたちの学力、ひいては将来を大きく規定する、と一般的には考えられている。しかし、学力上昇層のようにたとえ塾に通わなくても、家庭でさまざまな教育活動を行うことで階層格差の克服は可能なのである。

また、本調査においても、学力上昇層の若者



表9 学力上昇層を従属変数とした重回帰分析の結果

	非標準化係数		$\beta$	t	有意確率
	B	標準誤差			
(定数)	1.319	0.242		5.452	0.000
性別	-0.028	0.064	-0.031	-0.438	0.662
アルバイトだけでも生活できる	0.016	0.035	0.033	0.472	0.637
自分にあった仕事をさがしている	0.076	0.036	0.149	2.130	0.034
正社員よりもたくさんお金が稼げる	0.029	0.036	0.058	0.810	0.419
塾に通っていた	-0.062	0.025	-0.167	-2.417	0.017
博物館・美術館に行く	0.053	0.033	0.116	1.635	0.104
家族とよく会話	-0.003	0.034	-0.005	-0.075	0.941
欲しいものを買ってもらえない	0.017	0.038	0.031	0.437	0.663
仲のよい先生が多い	0.039	0.033	0.083	1.191	0.235

(R=0.284,  $R^2=0.081$ , n=430)

のサンプル数そのものは次の学力最上位層と同等であった。ゆえに、「使い捨てられる若者」になることも「迷路」にたどり着かないBb層の若者よりは少なくなると考えられるのである。

##### ⑤ 学力最上位層の若者の分析結果

最後に学力最上位層の若者の分析結果である(表10参照)。

これをみると、彼らにもっとも影響を与えている項目は「図書館を利用している」であった。これと同様の傾向として「宿題をきちんとする」という項目もあげられるであろう。

ここから、学力最上位層は学力最下層である

Bb層と間逆の傾向がうかがえる。すなわち、学校文化との高い親和性である。彼らは学校での学習活動に適応しており、働くようになってからも学校に対する印象はよい。

学校文化との親和性が次に $\beta$ 値の高い「低賃金でも好きな仕事」に対して、それよりも「高収入でも嫌な仕事」を選ぶ若者が多くなっていると考えられるのである。今回分析をおこなった5層のなかで、「低賃金よりも好きな収入」が「高収入でも嫌な仕事」を下回ったのは学力最上位層だけである。彼らは一番「使い捨てられる若者」になりにくく、低賃金労働から早く脱出したいという意識が見えてくるのである。

表10 学力最上位層を従属変数とした重回帰分析の結果

	非標準化係数		$\beta$	t	有意確率
	B	標準誤差			
(定数)	1.996	0.162		12.353	0.000
低賃金でも好きな仕事	-0.085	0.045	-0.130	-1.912	0.057
友人にフリーター	-0.018	0.021	-0.060	-0.874	0.383
一生低賃金で働くことに賛成	-0.032	0.023	-0.092	-1.358	0.176
家庭で学校の話	-0.007	0.021	-0.023	-0.339	0.735
進路に関して干渉された	0.014	0.019	0.052	0.776	0.439
図書館を利用	0.038	0.018	0.148	2.089	0.038
宿題をきちんとする	0.027	0.018	0.107	1.498	0.136

(R=0.283,  $R^2=0.080$ , n=430)

### Ⅲ. 学力別にみられる「使い捨てられる」 若者の特徴の背景にあるもの

以上の重回帰分析の結果を受け、学力の上下によってどのような項目がどの程度強いのか、上から $\beta$ 値の高い項目を順に並べなおし、一覧にしたものが表11である。

まず、Ⅰの「迷路」で迷う若者（Ab層）の背景にあるのは比較的裕福な家族のもとで「教育関心が高い」、「小遣いをきちんともらう」、「アルバイトだけでも生活できる」ことを保障している親の存在があげられる。それはアメリカで問題になったヘリコプター・ペアレンツのような親の存在がこの階層の若者の問題の背後に見え隠れすると考えられる。

次に、Ⅱの経過的措施として「使い捨てられ

る」ことを選択した若者（Ba層）についてである。彼らの多くは「自分にあった仕事を探す」ためにアルバイトをしているのではないため、将来の自分の仕事について明確な意思をもってしていることが多い。

また、「勉強しろと言われた」、「塾に通っていた」、「家族で外食する」という結果からもわかるように、家庭環境もある程度の水準を保っているといえるだろう。ある程度職業志望や家庭環境も一定の方向性や水準がみられるにもかかわらず、「あえて」低賃金労働に従事しているところに彼らの特徴がうかがえる。

そして、Ⅲの「迷路」にたどり着かない若者（Bb層）についてみていきたい。「宿題をきちんとしない」、「周りに勉強する雰囲気がない」

表11 学力分類別若者の特徴モデル

	上	中	下
上	<b>V. 学力最上層の若者</b> ①図書館を利用 (0.148) ②低賃金でも好きな仕事 (−0.130) ③宿題をきちんとする (0.107) ④一生低賃金に賛成 (−0.092) ⑤友人にフリーター (−0.060) ⑥進路に関して干渉された (0.052) ⑦家庭で学校の話 (−0.023)		<b>Ⅰ. 迷路で迷う若者</b> ①親の教育関心が高い (0.185) ②将来就きたい仕事かわからない (0.133) ③友達が多い (0.123) ④学校が好き (0.101) ⑤家族とよく会話 (0.099) ⑥小遣いをきちんともらう (0.099) ⑦アルバイトだけでも生活できる (−0.068)
中	<b>Ⅳ. 学力が上昇した若者</b> ①塾に通っていた (−0.167) ②自分にあった仕事を探している (0.149) ③博物館・美術館に行く (0.116) ④仲のよい先生が多い (0.083) ⑤正社員よりもお金が稼げる (0.058) ⑥アルバイトだけでも生活できる (0.033) ⑦女性 (−0.031) ⑧欲しいものを買ってもらえない (0.031) ⑨家族とよく会話 (−0.005)		<b>Ⅱ. 「経過的措施として使い捨てられる」ことを選択する若者</b> ①自分にあった仕事を探している (−0.155) ②勉強しろと言われた (0.113) ③塾に通っていた (0.077) ④テレビゲームで遊ぶ (0.076) ⑤低賃金でも好きな仕事 (0.068) ⑥家族で外食する (0.067) ⑦自分の時間を有効に使う (−0.009) ⑧女性 (−0.006)
下			<b>Ⅲ. 「迷路」にたどり着かない若者</b> ①宿題をきちんとする (−0.183) ②男性 (0.108) ③周囲のフリーター率高い (0.098) ④動物園・キャンプに行く (0.084) ⑤努力して働くことがイヤ (−0.076) ⑥まわりに勉強する雰囲気なし (0.051) ⑦正社員よりもたくさん稼げる (−0.007)

(図中の ( ) 内の数値は $\beta$ 、①・②は $\beta$ の高さの順位を表す)

という学校文化との親和性の低さが彼らの特徴であるといえる。これは、ウィリスが指摘した「野郎ども」と同様の傾向を示している。日本では、イギリスのハマータウンに存在していたような労働者階級の文化がそもそも存在しない。しかしながら、近年のゆとり教育に代表される格差の拡大は、結果的に家庭環境に不利な若者を学校から排除させる方向に働いた。それが、若者世代において「使い捨てられる」状態とさせているのではないだろうか。

ここでは、数値としてはっきりでていなかったが、学力が落ちてしまった、もしくは最下層である3層に共通してみられるのは、「ゲームが好き」、「アルバイトだけでも生活できる」、「正社員よりもたくさん稼げる」といった社会が用意したさまざまな娯楽や低賃金労働を積極的に受け入れる若者の姿である。これはジョージ・リッツアが提唱した「マクドナルド化」された若者といえるだろう。とくに学力が下がった若者については、社会が用意したさまざまな「商品」を受け入れる姿が共通してみられるのである。

それから、Ⅳの学力が上昇した若者については、明らかに家庭での階層が低いと思われる「塾に通っていない」、「欲しいものを買ってもらえない」といった傾向がみられた。本来であるならば、家庭の社会階層が低位であることは、学力の低下につながるものが先行研究からも明らかにされているが、彼らは「博物館・美術館に行く」、「仲のよい先生が多い」といった学校文化との親和性や家庭教育の充実が彼らの学力を上昇させたのではないかと考えられる。また、低賃金労働に従事している理由として、Ⅰのように「やりたいことがわからない」のではなく、「自分にあった仕事を探す」ためであり、就業に対しても積極的な面がみられる。これは、学力の向上が彼らに職業選択の幅を広げ、たとえ現状は低賃金であっても、将来志望する職業が

見つければそちらへ流れる可能性を感じることでできる傾向であるといえるだろう。このようにたとえ社会階層が低くても、家庭や学校での取り組み次第では、子どもたちの学力は大きく向上することが可能であると、Ⅳのデータは示している。すなわち、志水宏吉が指摘した家庭や学校での子どもたちの教育に対する関心の高さを示す「教育資本」によって、彼らは階層の壁を克服できたといえるだろう。「教育資本」については後述するが、この部分は「教育を動かすことによって、社会のある部分を変化させることは可能か？」という教育社会学のテーマに対する一定の回答になりえる、と考えられるのである。

その一方で、ちょうど学力が中心付近にある学力上昇層、「迷路」で迷う若者、経過的措置として「使い捨てられる」ことを選ぶ若者にみられる傾向として、バイク便ライダーや介護補助など、自分たちの興味・関心や娯楽の延長として「やりがい」をキーワードに過酷な労働条件を強いられることをいとわないことがあげられる。「低賃金でも『やりがい』がある」ので現在の仕事を続けている若者はこの3層から多く排出されている。なぜなら、Ⅴの学力最上位の若者は賃金と見合わない「やりがい」のある仕事に対しては見向きもせず、反対にⅢ「たどり着かない」若者は就業そのものに背を向けているため、どれだけ「やりがい」があろうとも、その仕事に就かないと考えられるのである。

最後にⅤの学力最上位層の若者は「図書館を利用する」、「宿題はきちんとする」といった学校文化との親和性が5層のなかでもっとも高い。その一方で「高収入だが嫌な仕事」、「一生低賃金に反対」というように、「使い捨てられる若者」の生き方そのものには真っ向から反対している。現時点では「使い捨てられている」が、近い将来にはこの状態を早く脱出したいという思いがみて取れる。周りにフリーターの友

人がほとんどいないのもこの層の特徴であるといえるだろう。

しかし、家族関係に目を転じてみると、「進路に関して親に口出しされた」、「家庭で学校の話題」など、彼らに対する親の態度がうかがえる。これはⅠ「迷路」で迷う若者と同様に、ヘリコプター・ペアレンツの存在があると考えられる。彼らは絶えず子どもたちの挙動を注視しており、子どもの身になにかあればすぐさま駆けつけて、子どもに代わってさまざまなトラブルシューティングをおこなう。このような親の元で育った若者は絶えず親の影に隠れて生活し続けているのだ。

#### Ⅳ. 家庭階層を克服するための「教育資本」の発想

以上の分析から導き出される結論としては、以下のようにまとめることができる。日本ではイギリスのように家庭環境の不利から迷路にたどり着かない若者、アメリカのように低賃金労働を許容する環境にある迷路で迷う若者、将来希望する職業につくために経過的措置として使い捨てられることを選択する若者の3タイプが存在しており、一般にいわれるような就業対策としての教育や職業訓練の機会を増やすことによって「使い捨てられる若者」の状態から脱出できるケースは最後の場合のみであり、すべてのケースを解決する万能薬を考えることは難しい。すべての「使い捨てられる若者」を対象としながら、前述したような階層差を克服し、格差を縮小させるためにはどのような理論を立てることができるのかについて考えてみたい。ここで登場するのは志水宏吉(2007)が研究を進めている「効果のある学校論」であり、そこから導き出された「教育資本」の発想である。

「効果のある学校」をアメリカのエドモンズ(Edmonds, 1979)は、「人種や階層に由来する

と思われる学力格差を克服している学校」<sup>(注6)</sup>と定義している。

志水は学力調査を分析するなかで、同和地区を抱えていたり、文化的階層が低い家庭の子どもたちの多い学校であっても、学力保障のできている「効果のある学校」を発見した。そこでは、とくに低学力の子どもたちの学力保障がなされており、それに加えて、学習意欲や学習習慣が形成されていることにも注目した<sup>(注7)</sup>。「効果のある学校」の特徴的な取り組みとして、①家庭的にきびしい環境にある子どもたちの基礎学力保障にこだわる指導方針、②教育活動全般で取り組まれている「集団(仲間づくり)の原則」の堅持、③「教師集団のチームワーク」の重要性の3つが取り上げられている。

表12 「効果のある学校」の特徴

- |                 |
|-----------------|
| ①校長のリーダーシップ     |
| ②ビジョンの目標と共有     |
| ③良好な学習環境        |
| ④学習と教授への専心      |
| ⑤生徒たちへの高い期待     |
| ⑥動機づけにつながる積極的評価 |
| ⑦学習の進歩のモニタリング   |
| ⑧生徒の権利と責任の尊重    |
| ⑨目的意識に富んだ教え方    |
| ⑩学習を促進する教授組織    |
| ⑪家庭との良好な関係づくり   |

(資料) 志水宏吉『低学力への戦略 ―『効果のある学校』論の視点から』 荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店 2004 p.234

この特徴は志水がサモンズら(Sammons et al. 1996)が取り上げた「効果のある学校」のそれとも合致していた(表12参照)。

「効果のある学校」を生み出すのは親や学校、教師の熱心な取り組みであり、今後の日本の教育を考えるうえで重要であるという示唆を与えている。

志水は「効果のある学校」から着想を得て、経済資本やブルデューが提唱した文化資本、コールマンやパットナムが提唱した社会関係資

本では子どもたちの学力を保障したり、不平等を乗り越えるには不十分だと考えた。その結果、提唱されたのが「教育資本」の概念である。「教育資本」は、通常「教育にけるお金」や「教育につき込まれる経済資本」のことを指す場合が多い<sup>(注8)</sup>。しかし、ここで定義する「教育資本」はそれとは異なる。「教育資本」とは、子どもに対してどのくらい関心が高いのか、あるいは教育に対してどのくらい関心があるのか、子どもたちの周りにある家庭や環境といった階層の垣根を乗り越えることができる方策となるかもしれないという指摘である<sup>(注9)</sup>。たとえば、庶民的な暮らしをしていますが、子どもの教育に人一倍の熱意がある親がいる家庭は教育資本の高い家庭であり、教育資本の高い親に育てられることによって生まれながらの階層の不利を乗り越えられることができると考えるのである。

もうひとつは、学校の問題としても語ることができる。たとえ教育条件に恵まれない公立学校であったとしても、児童・生徒一人ひとりに熱心な先生が多く存在する学校ほど教育資本の高い学校であり、教育資本の高い学校であればあるだけ、子どもたちに対して高い水準の教育を提供することができるという論に立つ。したがって迷路にたどり着かない若者や経過措置として「使い捨てられる若者」が生み出されやすい層である、文化的・社会的に階層下位であっても教育資本という考え方によって、それを救済したり乗り越えたりすることが可能となるのである。実際に大阪府教育委員会の調査からは、とくに小学校段階では学校の取り組みの工夫によって子どもたちの基礎学力の下支えができていているという結果も報告されている<sup>(注10)</sup>。また、教育資本の概念は、教師や学校での教育力の高さが熱意として親にも影響するため、子どもたちの学力を支え、自主的な進路選択を促す方向に向けられるとも考えられる。

確かに「効果のある学校論」は、学校や先生

の努力によるところが大きく、熱意のある教師の人事異動や教師集団の疲弊によって、継続性に乏しいという指摘がなされたり、総じて計量的研究に偏りすぎるなどの批判はある。しかしながら、前節で指摘したような階層による不利を乗り越えるための希望として、「教育資本」の概念や「効果のある学校論」の考え方は今後も検討を重ねる必要がある。それらを基盤とした就労支援は、「広く投網を打つ」式のこれまでの就労政策に一石を投じる可能性を秘めているといえよう。

#### 【注記】

- (注1) 原清治「低賃金で働く『使い捨てられる』若者たち」山内乾史編『開発と教育協力の社会学』ミネルヴァ書房 2007 pp.82-100
- (注2) 荻谷剛彦は日米の高校を比較し、日本では就職採用に学業成績が及ぼす影響がアメリカより強く、企業も職業選抜を学校に委ねているため、就職希望の高校生であっても高等学校の重要性を高めたことを指摘している（荻谷剛彦『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会 1991 pp.213-228）
- (注3) 堀有喜衣「高校生とフリーター」小杉礼子『自由の代償／フリーター』日本労働研究・研修機構 2002 p.119
- (注4) 社会階層変数として取り出した項目は以下のとおりである。①家族とよく会話をする、②友達に勉強する雰囲気になかった、③図書館を利用する、④学校の宿題はきちんとした、の4項目である。項目は「あてはまる」を4、「あてはまらない」を1とした（②のみ「あてはまる」を1、「あてはまらない」を4としている）合計を算出し、そこから得点を3等分し、上位3分の1を「社会階層上位」、中位3分の1を「社会階層中位」、下位3分の1を「社会階層下位」とした合成変数を作成した。
- (注5) 本来ならば、それぞれの「使い捨てられる若者」がどのような特徴をもっているのかを比較する場合、平均の比較をおこなう分散分析を用いることが妥当であると考えられる。本文には記載していないが、分散分析による全変数と「使い捨てられる若者」ごとのF値は

表4のとおりである。

まず、「迷路」で迷う若者の特徴としては、親が成績に関心があり、続いて友達が多い、家族との会話が深いというように、親や家庭に関する項目で有意差がみられている。次に、経過措置として使い捨てられる若者の特徴としては、図書館を利用する、自分にあった仕事を探していない、宿題はきちんとしており、親に勉強しろといわれぬ、といった項目がある。続いて、「迷路」にたどり着かない若者は宿題をしないに有意差がはっきりとみられており、続いて友達に勉強する雰囲気がない、友人にフリーターが多い、男性であるといった項目が並ぶ。そして、学力上昇層の特徴としては親が成績に関心強いが、塾には通っていない、自分にあった仕事を探しているが続く。最後に、学力最上位層の特徴としては小遣いをもらっていた、図書館を利用する、「低賃金でもやりがい」のためにフリーターをしていないといった項目であった。

以上のように、分散分析においても後述している重回帰分析と同様の傾向を示しているが、分散分析では各独立変数が従属変数である二群の平均値の差を比較しているが、それぞれの「使い捨てられる若者」全体をどの程度説明しているか、という視点を検証することができないため、本論文では従属変数を投入した独立変数でどの程度説明が可能か自由度調整済み決定係数 ( $R^2$ ) を算出する重回帰係数を用いている。

- (注6) 志水宏吉「低学力への戦略 —『効果のある学校』論の視点から」荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店 2004 p.220
- (注7) 同上, pp.223-231
- (注8) 志水宏吉「教育資本について」『教育文化学年報第2号』大阪大学大学院人間科学研究科教育文化学研究室 p.12
- (注9) 同上, pp.16-18
- (注10) 同上, p.15

## 【参考文献】

- 阿部真大『搾取される若者たち』集英社 2006
- 岩田正美・西澤晃彦『貧困と社会的排除 福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房 2005
- 内田樹『下流志向 学ばない子どもたち働かない若者たち』講談社 2007

- 江原裕美『開発と教育 —国際協力と子どもたちの未来』新評論 2001
- お茶の水女子大学21世紀COEプログラム『J E L S 第4集細分析論文集(1)』2005
- 荻谷剛彦『学校・職業・選抜の社会学 —高卒就職の日本のメカニズム』東京大学出版会 1991
- 川嶋太津夫「英国におけるStaff developmentの動向: エディンバラ大学の事例」有本章編『21世紀型高等教育システム構築と質の保証: FD・SD・教育班の中間報告』広島大学高等教育研究開発センター 21世紀COEプログラム 2004
- 小杉礼子・堀有喜衣編『キャリア教育と就業支援 —フリーター・ニート対策の国際比較—』勁草書房 2006
- ジョージ・リッツァ・丸山哲央編著『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房 2003
- 本田由紀『多元化する「能力」と日本社会 —ハイパー・メリトクラシー化のなかで—』NTT出版 2005
- 本田由紀『若者の労働と生活世界 —彼らはどんな現実を生きているか』大月書店 2007
- 宮本みち子「先進国における成人期への移行の実態」日本教育社会学会編『教育社会学研究 第76集』東洋館出版社 2005
- 矢野真和・濱中淳子「なぜ、大学に進学しないのか —顕在的需要と潜在的需要の決定要因—」『教育社会学研究第79号』2006
- 山田昌弘『少子社会日本 —もうひとつの格差社会のゆくえ』岩波新書 2007
- 山内乾史『開発と教育協力の社会学』ミネルヴァ書房 2006
- 労働政策研究・研修機構『若者の包括的な移行支援に関する予備的検討』2006
- Paul Willis, Learning to Labor: How Working Class Kids Gets Working Class Jobs, Gower Publishing Co, London, 1977 (熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども: 学校への反抗、労働への順応』筑摩書房, 1985)
- Stuart Tannock, Youth at Work: The Unionized Fast-food and Grocery Workplace, Temple University Press, Philadelphia, 2001 (大石徹訳『使い捨てられる若者たち』岩波書店 2006)